

ジョアシャン・ペリオン 『最良の翻訳法について』

榎本武文

ペリオンの翻訳論の歴史的文脈：

キケロ主義とアリストテレスのラテン語訳

16 世紀フランスの人文主義者・神学者ジョアシャン・ペリオン（Joachim Périon; Joachimus Perionius, 1499-1559）はロワール川流域トゥレーヌ地方の
コルムリに生まれてベネディクト会士となり、1542 年パリ大学で神学博士号を取
得、同大学の神学教授になったが、アリストテレスの翻訳者として高名であり、ア
リストテレスの著作の大部分をキケロ主義的ラテン語に翻訳した⁽¹⁾。この論文は、
ペリオンが1540 年パリで出版した『ニコマコス倫理学』ラテン語訳に付した前書
き・注解『最良の翻訳法について』（*De optimo genere interpretandi*）の分析
を目的としている。しかし、ペリオンに話を進める前に、まず彼の活動の背景をな
すルネサンス期のキケロ主義という現象およびアリストテレス的伝統の継続につい
て概観しておくべきだろう。

15-16 世紀のイタリア・フランスを中心とする西ヨーロッパでキケロをラテン
語散文の最高の手本とする動きが起こったことは、ルネサンス研究者にはよく知ら
れている。もちろん、古代ローマの共和制末期・帝政期においてすでにキケロは代
表的な散文作家と見なされていたし、ルネサンス期の人文主義が古代的価値観の復
活を目標にする限りにおいて、人文主義者はキケロのラテン語を模倣せざるをえな
かった。しかしながら、一部の人文主義者はキケロが使った語彙・構文のみを用い
るべきだという極端なキケロ主義の立場に到り、それに反対する折衷主義者との間
で論争が起こった。15 世紀末フィレンツェのパオロ・コルテージとアンジェロ・
ポリツィアーノ、16 世紀初めのヴェネツィア人ピエトロ・ベンボとジャンフラン
チェスコ・ピコ・デッラ・ミランドラ、同じく16 世紀初頭北ヨーロッパを舞台と
するクリストフ・ド・ロングイユとデシデリウス・エラスムスが交えた論戦を挙げ
ておけば十分だろう。ペリオンはこのキケロ主義陣営に位置づけることができる。

ただ1人の著述家を模倣の手本とするキケロ主義は現代人の目には奇矯な考え方に映るが、ここでユルゲン・レオンハルトが最近提示した刺激的な解釈を紹介しておきたい⁽²⁾。第1に、紀元前5-4世紀アテナイの作家たちが用いたアッティカ方言を「古典語」として固定化・規範化していた古代ギリシア語——先行する文化言語であるシュメール語、バビロニア語、エジプト語と同様に——とは違い、古代のラテン語は広い時代と地域にわたって使われたため「古典語」としての固定した形態を持っていなかった。それに加えて、ルネサンス期の人文主義者たちが受け継いだラテン語は、古代末期から中世にかけて用いられる過程で古代とは異質な特徴を備えるようになっていたのであり、彼らが古典的規範を求めてキケロに目を向けたのは自然なことである。第2に、15-16世紀は近代俗語の固定化・規範化が進んだ時代であり、ラテン語と近代諸語が同時代に古典的規範を求めたことはパラレルな現象である（ベンボが『俗語散文論』でイタリア語の規範化を目指したことを参照）。この解釈に従えば、キケロ主義は長いラテン語史の中でおよそ1世紀半にわたって起こった「古典語」形成の正常な試みと見ることができる。

アリストテレスが中世スコラ学の主要なテキストだったことは言うまでもないが、ルネサンス期にもこの伝統は継続した⁽³⁾。神学部・法学部・医学部を中心とするヨーロッパの大学という制度は中世からルネサンス期にかけていくらかの変化を受けつつ存続したから、これは当然のことである。だが、大学だけでなく、人文主義者の間でもアリストテレスの権威は力を失わなかった。人文主義的アリストテレス研究は近年のルネサンス学の流行と言ってもいいだろう。主として形而上学・自然学を研究したスコラ学者と異なって、人文主義者は道德哲学の著作、『ニコマコス倫理学』、『政治学』、（現在では偽書とされる）『家政術』に関心を向け、それらを「純粋な」ラテン語に翻訳しようと努めた。中世に由来する既存の翻訳は、「野蛮な」ラテン語で書かれていて人文主義の美的基準に合わないだけでなく、アリストテレスの「雄弁な」（と人文主義者たちは考えた）ギリシア語を正しく表現していない。こうして、膨大な数の人文主義的ラテン語訳が生み出され、写本と印刷本で流布していった⁽⁴⁾。

この翻訳活動をめぐるさまざまな問題点についてはチャールズ・シュミットの古典的研究⁽⁵⁾に譲るとして、ここでは人文主義者のラテン語訳の2つの特徴を指摘しておきたい。まず、単語ではなく考えに即して翻訳すること。中世の翻訳者が従

った、ギリシア語原文の単語・構文をそのままラテン語でもなぞる逐語的翻訳は機械的な手順で理解しやすいものである。問題は、14世紀末にイタリアに移住したビュザンティオンの学者マヌエル・クリュソロラスに由来する、「考え（意味）に即して翻訳する」(ad sententiam transferre)という曖昧な表現である。考えを移すことにより、ギリシア語の特質を変化させずにラテン語に翻訳する。具体性のないこの思想から、その後のアリストテレスの人文主義的ラテン語訳が生み出されていった。次に、ギリシア語の単語を音訳することを避け、それらに相当するラテン語の単語・句で言い換えること。音訳はラテン語読者には意味不明だけでなく、美的にも醜い。また、言い換えのラテン語は中世の野蛮な語句ではなく、古代に由緒正しい典拠を持つものでなくてはならない。これらの特徴は、そのままクリュソロラスの弟子ブルーニの翻訳論に表われている。

15世紀フィレンツェにおける『ニコマコス倫理学』のラテン語訳： レオナルド・ブルーニ、ヨアンネス・アルギュロプロス

15世紀前半にフィレンツェの書記官長を務めたレオナルド・ブルーニ (Leonardo Bruni; Leonardus Aretinus, ca. 1370-1444) はイタリアの代表的な初期人文主義者であり、プラトン、デモステネス、プルタルコスを含むギリシア語作家をラテン語に翻訳した。アリストテレスの著作からは『ニコマコス倫理学』、『家政術』、『政治学』を訳し、『ニコマコス倫理学』の翻訳 (1416-17年)⁽⁶⁾に論敵から受けた批判に答えて、『正しい翻訳について』(*De interpretatione recta*, 1424-26年)を著した。すでにラテン語訳の序文において、中世の翻訳者の音訳とラテン語の微細な意味の差異への無知を痛烈に批判していたブルーニは、ここでいくつかの翻訳の指針を明示している⁽⁷⁾。(1)あらゆるジャンルの著作家を読むことによってギリシア語の正確な知識を得ること。(2)単語の文字通りの意味と慣用句に用いられた場合の意味の違いを知ること。(3)ラテン語を完全にマスターし、ギリシア語の単語の音訳を用いないこと。また、iuventusとiuventa, urbsとcivitasなどの意味の違いを正確に知ること。(4)最良の著作家が用いる文彩に親しみ、新奇で野蛮な単語や言い回しを避けること。(5)鋭敏な耳を持つことにより、とりわけプラトンとアリストテレスの調和のとれた文章をそのまま移すこと。(6)画家が絵

を模写する時のように、最良の翻訳者は全精神をかけて自らを原著者に変形し、著者の文章の容姿・姿勢・歩き方・肌の色・顔立ちをそっくり表現しようと努めるものだ⁽⁸⁾。(7)最良の翻訳の方法とは、原文の姿をできるだけ忠実に保存し、言葉の意味も装飾も欠けないようにすることである。(8)翻訳の最も難しい点は、原著者が韻律と装飾を用いて書いた文章を移すことである。これを保存しない限り、原文の輝きはすっかり失われてしまうからである。ブルーニによるアリストテレスのラテン語訳は15世紀前半を通して手写本で広く流布し⁽⁹⁾、印刷術発明後は印刷本でも伝播していった。とりわけ『家政術』は16世紀に入っても標準的な翻訳として使われ続けた。ところがブルーニ訳『ニコマコス倫理学』は、15世紀後半にもう1つの人文主義的翻訳に席を譲ることになる。

ヨアンネス・アルギュロプロス (Joannes Argyropoulos/Argyropylus, ca. 1415-87) はコンスタンティノポリスに生まれて修辞学・哲学の訓練を受けた後、1430年代の終わり頃イタリアへ渡来、パドヴァ大学においてラテン語で教育を受けるかわりギリシア語の教授も行なった。1453年のコンスタンティノポリス陥落に伴いイタリアに永住し、1456-71年にフィレンツェ大学でギリシア語・ギリシア文学・哲学の教授を務めた。アルギュロプロスの講義の対象はアリストテレスであり、人文主義者の関心の中心だった道徳哲学だけでなく、論理学・自然学・形而上学についても講義を行なった。同時期のフィレンツェでマルシリオ・フィチーノがプラトンを教授しラテン語に翻訳したように、アルギュロプロスはアリストテレスを体系的にフィレンツェ人に教え翻訳したのである⁽¹⁰⁾。

1457-58年度のアギュロプロスの講義の対象は『ニコマコス倫理学』で、講義にブルーニの翻訳への批判を交えたが、その後自らのラテン語訳を作成した⁽¹¹⁾。そして、16世紀には、ブルーニ訳に代わってアルギュロプロス訳の『ニコマコス倫理学』がスタンダードな翻訳として印刷されることになる(16世紀に印刷されたブルーニ訳は13種、アルギュロプロス訳は81種)⁽¹²⁾。さらに、アルギュロプロスの学生の1人ドナート・アッチャイウオーリ (Donato Acciaiuoli, 1429-78) は『ニコマコス倫理学』の講義内容を丹念にノートにとり、後に注解として公表した(手写本1463-64年、印刷本1478年)⁽¹³⁾。アッチャイウオーリの注解は15世紀の間に十数版を重ね、広く読まれた。

ペリオン『最良の翻訳法について』前書きの論旨

ジョアシャン・ペリオンは自らの『ニコマコス倫理学』ラテン語訳⁽¹⁴⁾の冒頭に掲げた庇護者フランソワ・ボイエ司教宛書簡の中で、ギリシアの歴史家にはロレンツォ・ヴァッラ、ポッジョ・ブラッチョリーニ、ポリツィアーノらによる原文の光輝をそのまま伝える翻訳が存在するのに対し、「アリストテレスの著作では……読者の前に突然考えと事柄の不明瞭さと言葉の新奇さ・無味乾燥さが現われ、それに比べれば、読み書きの初歩を覚えただけの学童でもより巧みに話し書くことができると思われる」⁽¹⁵⁾ほどだ、と述べて、先行する翻訳者たちをまとめて無用のものにしようとしている。哲学を研究した人間には雄弁を身につけ巧みな翻訳をすることができなかった、というこの断定的態度は、ラテン語訳に付した『最良の翻訳法について』⁽¹⁶⁾の前書きと注解の中でよりいっそう強く、また詳細に表現されている。

前書き⁽¹⁷⁾でまずペリオンは、現代人の翻訳に欠陥がある原因を説明する。[a 3 r] 翻訳と著述を同じ仕方で行なうことができた古代人とは違い、現代人は自分の著作と翻訳の文体がかけ離れているために、同一人物ではなく多数の別人が書いたように思われる。[a 3 v] その原因の1つは、他人の考えを（翻訳して）言い表わすことと自分の考えを表現することが別々であるところにある。しかし、これよりも重要で本質的な原因が2つある。(1)翻訳の最も重要な原理とは、まず、翻訳する本の考え（意味）を節ごとに心に思い浮かべ、次に、心の内にあるものを他人ではなく自分が思いついたものとして言い表わそうと望み、豊かに輝かしく表現しようとして、思考を巡らすことだが、[a 4 r] あたかも宗教のように逐語的な（単語を1対1に対応させる）翻訳でなければ原著者の考えを訳したことにはならないとする人たちがいる⁽¹⁸⁾。(2)ある1つの技芸（学問）に秀でていながら、他の技芸に秀でようと努めても、その内容を豊かで文飾あるやり方で論じることができない、というのも、さまざまな学問で正しく理解したことを巧みな文章で言い表わせない人びとが多いのである。これはとりわけ哲学の分野において顕著である⁽¹⁹⁾。

人びとは巧みな表現法をキケロから学ぶべきである、キケロこそがラテン語で哲学を論じ、教えた唯一の人なのだから。[a 4 v] キケロだけが、弁論においても翻訳においても最良の方法を作り上げたのである。キケロは何か1つの学問だけではなく、彼が論じたすべての学問でこの栄光を勝ち得たのだ。しかし、とりわけ哲

学においてキケロへの称賛は大きい。キケロは独自の哲学著作の中でプラトンやアリストテレスの思想を論じたり訳出したりしているだけでなく、プラトンの『プロタゴラス』、『ティマイオス』、クセノポンの『家政術』をラテン語に訳している。もしこれらの翻訳が伝存していたならば、ラテン語で哲学を論じる人たちにとって最も確実な規範になったことだろう。[a 5 r] 『ティマイオス』の訳の断片だけが伝存しているが、私は注解の中でプラトンのギリシア語とキケロのラテン語を併置して、読者の便宜を図ることにした。私はキケロが最良の翻訳の方法において傑出していたと考えるために、キケロの『最良の種類の弁論家について』に倣って、翻訳に関するキケロの例や教えを大量に含むこの書物を『最良の翻訳法について』と題することにしたのである。

[a 5 v] アリストテレスの『ニコマコス倫理学』をラテン語に翻訳する際に、私はキケロただ1人だけを模倣することに決めたので、翻訳に関してキケロから学んだ事柄をすべての人びとに伝えることにしたい。私は最良の翻訳法についてキケロの著作のあちこちに散在する教えをこの書物の中に1つにまとめたから、われわれはそれらの教えを読んで守ることにより、翻訳のラテン語をより豊かなものにするができるだろう。

[a 6 r] 注解に書いた事柄をあらかじめこの前書きで簡単に述べておこう。(原文にある) ことを心の中で深く認識し、それらをあたかも自分が考え出したかのように見ることができ、またキケロの著作をよく読んだ人こそ、最初に述べた2つの悪弊を避けることができる。逐語的翻訳を避けて1個のギリシア語の単語を複数のラテン語の単語で言い表わすべきことを、キケロ自身が『善と悪の究極について』第3巻で述べている。[a 6 v] 「拙い翻訳者がよくするように逐語的に訳すことだけが必要ではないだろう……。私はしばしばギリシア人が1つの単語で言っていることを、他に方法がない場合は、複数の単語で言い表わすことがある」⁽²⁰⁾。キケロのこの教えは翻訳という技芸の中に隅々まで浸透しているために、この教えをとり去ってしまったならば、この技芸にはもはや存在する余地がなくなるほどである。しかし、キケロを模倣する人たちすべてではなく、ギリシア語とキケロの書物のラテン語とを結びつけた人たちだけをこの中に含めるべきだと私は考える。[a 7 r] どの(ギリシア語の)1個の単語がどの(ラテン語の)複数の単語に対応するのか、またどの1個の単語がどの1個の単語に対応するのかを知る必要があ

るからである⁽²¹⁾。

このことを行なうためには、(比較する)ギリシア語とラテン語が同じ著作ジャンルに属することがふさわしい。たとえば、ギリシア語の道徳哲学を読もうとする人は、(キケロの)弁論や修辞学書や書簡ではなく、キケロが道徳哲学をラテン語で書いた書物だけを読めばいい。キケロは(ギリシアの)哲学者から翻訳した事柄を自らの哲学書に、修辞学者から翻訳した事柄を修辞学書に、弁論家から翻訳した事柄を弁論に移し替えたのだから。[a 7 v] キケロは『法律について』第1巻で次のように述べている。「もしローマの詩人たちが(ギリシアの)劇を翻訳するようなやり方で私がプラトンやアリストテレスを訳したとしたら、ローマ市民たちに義務を果たしたことはないだろう」。[a 8 r] ウェルギリウスはテオクリトスの詩句を『アエネイス』や『農耕詩』でラテン語に訳しているだろうか？ あるいはアラトスを『牧歌』で、ヘシオドスを『アエネイス』で、ホメロスを『農耕詩』で訳しているだろうか？ もちろんそうではなく、テオクリトスを『牧歌』、アラトスを『農耕詩』、ホメロスを『アエネイス』で翻訳したのである。それゆえ、ここですべての人たちに次のように教示しておこう、キケロの書物と同じ内容が含まれているギリシア語の書物とをもっぱら結びつけるべきであると。[a 8 v] このようにして初めて、われわれはそれぞれの技芸(学問)に固有のラテン語の個別の単語を保持できるし、それらを組み合わせて巧みに豊かな仕方で言い表わすことができるのである。この労(同じジャンルのギリシア語とラテン語を結びつけること)を厭う人たちが、個別および組み合わせた単語を貧弱で野蛮な仕方を使うことになるのは必然である。

逐語的に翻訳することのできる種類の単語は多いために、同じことを言い表わす他の(複数の)単語を用いずに、常に1個の単語のみを使い続けるとしたなら、彼らの文章はいかに貧弱で瘦せたものになることだろうか？ さらに、逐語的翻訳のできない種類の単語も多いことから、彼らの翻訳が拙くなるのは当たり前ではないだろうか？ 話をわかりやすくするために、よく知られた例を挙げることにしよう。『ニコマコス倫理学』でアリストテレスがしばしば用いている *τέλος* という単語を、これまでこの書物を翻訳してきた人びとはほぼ常に *finis* としているが、私はキケロが *finis* の代わりに *extremum*, *ultimum*, *summum* を使い分けていることに気づいたので、同じように使い分けるべきだと考えた。同様に私は *γίγνεσθαι*

を fieri, effici, nasci, oriri, esse, existere, gigni と場合に依じて翻訳した。[b 1 r] (ギリシア語と) ラテン語を 1 対 1 に対応させることはできるが、退屈を生む単調さを避けようとするなら、複数の単語を用いて翻訳すべき単語があるのだ。

もしも翻訳という行為が他人の考えを忠実に伝えることだけを目的としているのならば、それ (1 対 1 の逐語的翻訳) でも十分であろうが、翻訳は文章であり、文章は光彩を持ち、豊かで輝かしいものでなければならないがために、こうした文彩を欠いてはならないのである。さもないと翻訳は衣装を剥ぎとられることになってしまうだろう (22)。

これに似た例が *εἶναι* で、他の人たちは文字通りに *esse* と訳しているが、私はキケロが *status* と訳していることを示した。複数の単語を組み合わせる時はさらに注意をする必要があり、個々の単語が正しいラテン語であるだけでなく、お互いに調和したやり方で組み合わせられているよう配慮しなければならない。[b 1 v] *παρέχειν* は *praeberere* と *praestare* と ラテン語に訳され、*ἔρως* は *amor*, *σοφία* は *sapientia*, *ἀρετή* は *uirtus* とすることができるから、'*Sapientia amorem uirtus praestat/praebet.*' はラテン語の文になるはずである。しかしながら、*παρέχειν* は *affert* か *parit*, あるいはキケロがプラトンを翻訳している時のように、*excitat* とするべきなのである。連語に関しても同様の注意をしなければならない。*φίλαντος* というギリシア語を、キケロは *charus sibi, sui diligens, qui se diligit* とラテン語に訳しているが、他の人たちは無知や怠慢が原因でこれに従わず、*amantes sui* や *amatores sui* と訳している。キケロは *amantes* と *amatores* を使っているが、属格の *sui* と連語にしたことは一度もないのである。さらに、ギリシア語では単数で使われる単語をラテン語で単数にするのはふさわしくないことがある。たとえば *ποιεῖσθαι λόγον* という表現の *λόγον* がこれに当たり、*facere uerbum* とラテン語で言うことは可能だが、複数の単語を用いて *uerba facere*, あるいは *habere sermonem* とするべきなのである。

[b 2 r] われわれがもしギリシア語から巧みに翻訳したいと望むのであれば、次の 2 つのことを必ず守るべきである。(1) 単語を 1 対 1 に対応させて (逐語的に) 翻訳しなければならないという考え方を捨てること。(2) ギリシア語を、特にキケロの、同じジャンルで用いられるラテン語と組み合わせること。この 2 つをないがしろにする人は、必然的に拙いだけでなく野蛮なやり方で多くのことを言うことに

なってしまうだろう⁽²³⁾。

[b 2 v] 私はこうしたことを注解で事細かに述べたが、それはとりわけ、キケロの時代にラテン語で誕生し、ローマでは外国人のように思われた時にキケロがいわばローマ市民権を与えた哲学が、現代において再生し、追放の時代を経て再びローマ市民権を得ることができるようにと考えてのことなのである⁽²⁴⁾。

私は、私に反論するだけでなく、私の努力や研究の意義を否定する人たちが多くいるだろうことを知らないわけではないが、これは著述をする人間には避けられないことだから、自分の当初の目的を追求することにしよう。

ペリオンの注解

以上の前書きでペリオンの基本的な姿勢——逐語訳ではなくラテン語の慣用に合わせた柔軟な翻訳法を最優先すること、キケロの使ったラテン語のみを用いること、著作ジャンルによる語法の違いを重視すること——は十分に明らかだが、それに続く注解 (annotationes) では、個々の語句に対する語注のかたちをとって、翻訳の方法の細密な指示が与えられていく。ここではまず『ニコマコス倫理学』の冒頭、第1巻第1章への注解を見て、次に、この倫理学書のキーワードの1つ *προαίρεσις* という単語だけについて八折判 12 ページにわたって切れ目なく書かれたセクション (第3巻第2章) をやや詳しく要約することにしたい。たとえばこの箇所が、人文主義者としてのペリオンの特徴を最もよく表現しているように思われるからである。

(第1巻第1章)⁽²⁵⁾

[1] *πᾶσα τέχνη καὶ πᾶσα μέθοδος, ὁμοίως δὲ πρᾶξις τε καὶ προαίρεσις ἀγαθοῦ τινὸς ἐφίεσθαι δοκεῖ*. キケロ『善悪の究極について』第5巻がこの文を以下のように翻訳あるいはパラフレーズしている。‘Itaque omnis honos, omnis admiratio, omne studium ad uirtutem et ad eas actiones quae uirtuti sunt consentaneae refertur.’ それゆえ、まず、*ἐφίεσθαι* は *refertur* と訳すべきであり、次に、*δοκεῖ* は訳さず省略すべきである。〔付録に掲げた他の5種類の翻訳はすべて *appetere uide(n)tur* と訳している。〕

この2点についての私の考えを以下に述べよう。

[2] (1)キケロが自らも実践し他人にも教えた通り、常に逐語的な（単語を1対1に対応させる）翻訳をするべきではない。さらに、ラテン語の慣習にそぐわないことはすべて訳文から省くべきであり、このことをキケロは『最良の種類弁論家について』の中で述べている⁽²⁶⁾。論文の初めに、全体にとって重要な主張を行なう文で「思われる」（*δοκεῖ*/uidetur）など一体誰が言うだろうか、あるいは誰がそんなものを読みたがるだろうか？ ギリシア語では許容されることも、ラテン語は拒絶するのである。(2)*ἐφίεσθαι* に関して言うなら、たとえば、‘Grammatica expetit/appetit bonum.’ というラテン語の言い回しを認めるような学識ある人間がいるだろうか？ (3)確かに *ἀναφέρεσθαι* が *referri* を意味する動詞だが、キケロが模倣している文を見れば、ここで論じている単語 [*ἐφίεσθαι*] がその代わりに使われていることは明らかである。

[3] *πρᾶξις* はキケロの用法に従って *actio* と訳すべきである。〔ペリオン以前の4種類の翻訳は *actus* と訳していて、ランバンはペリオンに倣って *actio* としている。〕私の知る限り、キケロは *actus* という単語を2回しか使っていないのだから。〔[4]–[5] は *τέχνη* の概念内容を論じているため、ここでは省略する。〕

[6] *διαφορὰ δέ τις φαίνεται τῶν τελῶν*. を ‘Finium autem genera sunt plura.’ と私は訳したが、これはキケロ『善悪の究極について』第5巻からとったものである。私は、キケロのラテン語がこのギリシア語を訳したものだと思えるが、間違っているかもしれない。[7] しかし、哲学をラテン語で表現できるようにするためには、こうした大胆な誤ちを犯すことも必要なのである。

ἐνέργειαι は *actiones* と訳す。他の翻訳者たちは *operationes* としているが、これは野蛮なラテン語である。キケロは動詞の *operandi* という語形を『運命について』で1回しか使っていない。

γίνεται をここで *extiterunt* と訳したが、アリストテレスも他のギリシア語著述家もこれほど頻繁に用いる単語はないために、この動詞を常に1通りに訳すとしたら、文章から輝きと修飾をとり去ってしまうばかりか、暗黒を与えることになってしまうだろう。私は注解の中で、キケロが1ページで5、6通りに訳し分けたことを示すことにしよう。

キケロ『善悪の究極について』第4・5巻の用例を見れば、*ὕγεια* を *ualetudo*

と訳すべきことを理解するのは容易である。他の翻訳は *sanitas* とするが、これが拙い訳語であることは、少しでもキケロを読んだことのある人間なら容易にわかるだろう。キケロはこの単語を常に精神の平静な状態という意味で使っているのだから。

[8] ‘*Alicui facultati subiectae sunt.*’ は *εἰσὶν ὑπὸ μίαν τινὰ ἀρετὴν* の訳。これをもし逐語的に訳せば ‘*quae sunt sub una aliqua uirtute*’ となるだろうが、ラテン語では不可能な言い回しである。

‘*Magis expetendi sunt.*’ は *αἰρετώτερα τέλη*。他の翻訳者たちは *expetibiliores* としている。〔アルギュロプロスの訳は ‘*magis fuit expetibiles*.’ 〕キケロは 1 語で言う時には *optabiliores* を使っているが、これは実際にはまれなことで、ほぼ常に *expetendus* と書いているのである。

(第3巻第2章)(27)

[175] ここで私は、ギリシア人が *προαίρεσις* と呼ぶものをラテン人、とりわけキケロがどのように翻訳しているかを述べることにした。

ほとんどすべての翻訳は *προαίρεσις* を *electio* (選択) と訳しているが、私はさまざまなやり方で訳して、*consilium*, *propositum*, *institutum*, *delectus*, *animus*, *iudicium*, *uoluntas*, *prima animi susceptio* とした。キケロは『発想論』で、*consilium* を「何かをするかしないかに関する熟慮を経た判断」(‘*Consilium est aliquid faciendi, non faciendiue excogitata ratio*’) と定義しているが、[176] これはエウストラティオス〔11-12 世紀ビュザンティオンのアリストテレス注解者〕による *προαίρεσις* の定義「人間が行なう 2 つの選択肢の間の選択であり、欲求と精神の状態に従って一方を他方に優先させること」(*προαίρεσις δὲ ἡ δυοῖν προκειμένοις κρίσις ἀνθρώπου, τόδε προτιθεῖσα πρὸ τοῦδε καθ’ ὁρμὴν τε καὶ ἔξιν*)。(ペリオンの訳は ‘*Propositum seu consilium, iudicium est hominis, quo duobus propositis hoc illi conuenienter suae appetioni anteponit.*’) に近い。私は、他の翻訳者たちが *προαίρεσις* を *electio* と訳していることを知っているが、*electio* はキケロがしばしば使う単語ではないため、これと同じ意味のキケロが使っている語を探すことにしたが、私には *consilium* 以外の単語を見つけることができなかった。アリストテレスはこの章と次の章で、

προαίρεσιςとはわれわれが熟慮を経た後に従うものであることを教えているが、これを他の翻訳者たちは electio, 私は consilium と呼んでいるだけの話である。ここでの論議は事柄ではなく言葉に関するものにすぎないのだから、この意味での consilium はキケロの書簡に多数現われるので、いちいち例を挙げる必要はないだろう。

[177] キケロはギリシア語の προαίρεισθαι または αἰρεῖσθαι という動詞の意味を eligere というラテン語の動詞で表わしている。[178] ギリシア語動詞 προαίρεισθαι から名詞 προαίρεσις が派生しているように、ラテン語動詞 eligo から名詞 electio が派生しているように見えるが、キケロは一度も electio を使っていないのである。動詞 προαίρεισθαι は deligere, sequi, constituere, proponere と訳される。προαίρεισθαι τὸν βίον をキケロは『義務について』の中で deligere genus uitae, constituere uitam, rectam uitae sequi uiam とさまざまな動詞に訳している。

[179] 同じく『義務について』で、キケロは προαίρεσις を consilium, institutum, studium といろいろなラテン語に訳し分けている。キケロは時々 studium et institutum と2つの単語を結びつけた言い回しを用いているが、私が『ニコマコス倫理学』の冒頭の文で προαίρεσις を訳すのにこの2つの単語を結びつけたのはそのためである。

[180] προαίρεσις は時折 propositum と訳される。たとえば、デモステネスが『冠について』で προαίρεσις をこの意味で使っているが、キケロは『セステイウス弁護』で propositum を同様に使っているのである。それゆえ、動詞 προαίρεισθαι も proponere または suscipere と訳すことができる。

προαίρεσις はさらに animus や uoluntas と訳されるが、キケロはこれをより明瞭に言い表すために、『善悪の究極について』第3巻の中で prima susceptio と呼んでいる。[181] アリストテレスは『ニコマコス倫理学』第10巻(1178a34-35)⁽²⁸⁾の中で、徳に対して意志(προαίρεσις)と行為のどちらが力を持つか(πότερον κυριώτατον τῆς ἀρετῆς ἢ προαίρεσις, ἢ αἱ πράξεις)を問うているが、他の翻訳者たちはそれ以外に訳語を持っていないため、ここで προαίρεσις を electio〔選択〕と訳している。しかしながら、アリストテレスがここで徳に対する uoluntas〔意志〕と actio の力を比較していることに疑問の余

地があるだろうか？ 他の翻訳者たちが *προαίρεσις* を *electio* と訳しているのがいかに無知でありラテン語の慣用に背いているか誰にもわかるようにするため、ここでこれに類した例と典拠を挙げることにしよう。

アリストテレスは第8巻(1163a21-23)で次のように述べている。 *ἐν δὲ ταῖς κατ' ἀρετὴν, ἐγκλήματα μὲν οὐκ ἔστι, μέτρῳ δ' ἔοικεν ἡ τοῦ δράσαντος προαίρεσις. τῆς ἀρετῆς γὰρ καὶ τοῦ ἡθους ἐν τῇ προαιρέσει τὸ κύριον.* (ペリオンの訳は 'In iis autem amicitii quas uirtus conciliat, nullae quaerelae existunt, nullae obiurgationes: in iisque ex animo eius qui dedit, beneficium est omne ponderandum. Virtutis enim et morum laus omnis in animi iudicio et uoluntate consistit.')

徳が結びつける友人関係においては、不平不満は存在しないし、恩恵を施した側の意志によってその恩恵を考えるべきである。なぜなら、徳と人格の肝要な点はその人の意志の中に存するのだから、とアリストテレスはここで主張している。[182] これ〔第1文の後半〕をもし 'Mensura autem est eius electio qui beneficium contulit.' と訳したとしたら、そもそも意味をなすのだろうか？ あるいは、このように話すとしたら、その人はラテン語にまったく無知な人間ではないだろうか？ キケロ『義務について』第1巻からの次の引用文が私の考えを裏づけてくれる。 'In quo tamen in primis quo quisque animo, studio, beneuolentia fecerit, ponderandum est... quae beneficia aequae magna non sunt habenda, atque ea quae iudicio, considerate, constanterque delata sunt.' ここでの *animo* と *iudicio* は *ἔξει* と *προαιρέσει* *εὐποιεῖ* を訳したものだとは私は解釈する。

キケロはまた『義務について』の同じく第1巻で *προαίρεσις* を *uoluntas* とも言っている。

しかし、*προαίρεσις* は *ἔξις* と言い換えることもできる。『ニコマコス倫理学』第4巻 第1章(1120b7-9)の *οὐ γὰρ ἐν τῷ πλήθει τῶν διδομένων τὸ ἐλευθέριον, ἀλλ' ἐν τῇ τοῦ διδόντος ἔξει.* が示すとおりである。[183] この *ἐν τῇ τοῦ διδόντος ἔξει* が上に挙げた〔第8巻の〕 *ἡ τοῦ δράσαντος προαίρεσις* と同じ意味であることを疑うことができるだろうか？ 私はこれを *indantis animo et uoluntate* と訳す。[184] *προαίρεσις* を *animus et uoluntas* と訳すべき箇所をもう1つ挙げておこう。第9巻第1章(1164a33-1164b2)で

ある。ここで、*κατὰ προαίρεσιν ποιητέον τὴν ἀμοιβήν*を‘electione facienda est remuneratio’¹⁾と訳したなら意味をなさないだろう。しかしながら、アルギュロプロスはここも上に挙げた箇所もこのように訳しているのである。

*προαίρεσις*を *animi iudicium* と訳すべきところもある。第7巻 (1149b31–1150a1) のこの箇所をキケロは『善悪の究極について』第2巻でパラフレーズしており、*οὐκ ἔχει προαίρεσιν τὰ θηρία*を‘Bestiarum uero nullum iudicium puto’²⁾と訳している。[185] キケロはここで‘Vt bacillum aliud est inflexum et incuruatum de industria, aliud ita natum’³⁾と書いているが、de industriaはアリストテレスが『ニコマコス倫理学』第5巻 (1136a1) で *ἐκ προαιρέσεως* と言っているのと同じである。このアリストテレスの *ἀν δ’ ἐκ προαιρέσεως βλάβη ἀδικεῖ* の意味は、キケロ『義務について』第1巻の‘Atque illae quidem iniuriae quae nocendi causa de industria inferuntur, saepe a metu proficiscuntur’⁴⁾を参照すれば容易に理解できる。この nocere de industria と訳すべき箇所を、これまで『ニコマコス倫理学』をギリシア語からラテン語に訳してきた人たちは皆、無知なことに nocere ex electione としたのである。これ以上に稚拙な翻訳がありうるだろうか？

最後に、*προαίρεσις* は *propositum* ともし訳されることを示そう。同じものを指すのにアリストテレスが *σκοπός* と *προαίρεσις* を使っていることを示せば、このことは簡単にわかるだろう。第6巻第12章 (1144a7–9) で *ἡ μὲν γὰρ ἀρετὴ τὸν σκοπὸν ποιεῖ ὀρθόν, ἡ δὲ φρόνησις τὰ πρὸς τοῦτον* と書いた少し後で (1144a20–22), アリストテレスは *τὴν μὲν οὖν προαίρεσιν, ὀρθὴν ποιεῖ ἡ ἀρετὴ* と書いている。これら2つの単語をアリストテレスが同じ意味で使っていることを理解できない人がいるだろうか？

ペリオンに対する反応：ドニ・ランバン

ペリオンによって流麗なキケロ主義的ラテン語に訳されたアリストテレスの著作は広く好評と称賛を博したが、一方ではその不正確さに対する批判も起こり、たとえばニコラ・グルシによる（ペリオンの許可を経ない）「修正版」が出版されることになった⁽²⁹⁾。より根本的な問題は、ペリオンの訳語が伝統的な哲学の術語体系

から乖離していたことである。哲学には、修辞学的志向を持つ人文主義とは別の知的・制度的伝統がある。中世から安定して使われてきたアリストテレス哲学の基本的な概念を表わすラテン語語彙が仮に新しいものにとって代わられたとしたら、哲学論議に混乱をきたすことは避けられないだろう。わかりやすい例を挙げるならば、ペリオンはアリストテレスの著作の題名すらキケロのラテン語用法に従って変えようとした。『靈魂論』は伝統的なラテン語の題名 *De anima* ではなく *De animo* になり、『生成消滅論』は *De generatione et corruptione* から *De ortu et interitu* へ変更される⁽³⁰⁾。実際には、16世紀後半に人文主義的アリストテレスに対する反動が起こり、中世的なラテン語語彙や逐語的翻訳の復活が見られたのである⁽³¹⁾。

ドニ・ランバン (Denys Lambin; Dionysius Lambinus, 1519/20-72)⁽³²⁾ は庇護者フランソワ・ド・トゥーロン枢機卿に従って1549-59年イタリア各都市を周遊し、フランス帰国後は王立学院 (コレージュ・ロワイヤル) のまず修辞学、続いてギリシア語教授を務めた人文主義者・文献学者で、キケロ全集の校訂版を1565-66年に出版した。ペリオンに比べて技術的な文献学への傾向が強いとはいえ、人文主義者である点に違いはない。ランバンが1558年にヴェネツィアで出版した『ニコマコス倫理学』訳・注解⁽³³⁾を最後に一瞥して、この論文の締めくくりとしたい。ペリオンの場合と同じように、ランバンの前書き・注解の論旨をたどることにしよう。

(前書き (読者宛書簡))⁽³⁴⁾

[[*5] r] 読者は不思議に思われるかもしれない、かくも多くの著名な人びとによる『ニコマコス倫理学』ラテン語訳がすでに存在するのに、なぜまた私が新しい翻訳に着手するのか、と。だが、読者が私の期待するような人士であり、アリストテレスのギリシア語原文を他の翻訳と比較されたことがあるなら、それらの翻訳がどれほど純粋なラテン語とアリストテレスの考えからかけ離れたものであるかわかりになっただろう。

その一方で、ペリオンはそれまでの翻訳者をすべて凌駕したし、人びとの彼の雄弁への称賛のゆえに私はこの新しい翻訳を思いとどまるべきだった、ともお考えかもしれない。[[*5] v] 私はペリオンが彼の翻訳によって大きな称賛を得たことは

否定しないが、しかし、彼が先行する翻訳者のすべてに優越し、後代の翻訳者から何らかの称賛を得る希望を奪い去ったことは完全に否定する⁽³⁵⁾。

もしアルギュロプロスの名声がペリオンの企てを思いとどまらせなかったのなら、私が立派な企てを試みることをペリオンの翻訳が思いとどまらせる理由があるだろう。ラテン語の文章の光輝や優雅さ以外に、アルギュロプロスに欠けたところがあったらどうか？ この欠陥は彼本人ではなく時代の欠点だったのである。アルギュロプロスは深遠な学芸とギリシア文学の知識においていかに傑出していたのか？ あえてペリオンをアルギュロプロスに優先させるような頑固な称賛者がいるだろうか⁽³⁶⁾？

それなのに、ペリオンはアルギュロプロスの翻訳をいわば葬り去って新たな翻訳を企てたのである。それゆえ、ペリオンの評価によればアルギュロプロスは悪しき翻訳者ということになる。

ペリオンは傑出した人びとについて評価を下し、あたかも監察官であるかのように彼らの地位を剥奪しようとするが、他の人間は誰もペリオンの著作を評価してはいけなのだろうか？ 私はペリオンの名声を貶めるために発言するつもりはない。[[*6] r] だが、ただ1つ明言することができるのは、フランスとイタリアで私が出会ってきた才能と学識に秀でた人びとが、あるいはペリオンの入念さに欠けるところがあると言い、あるいは1つの分野で書かれたペリオンの全著作を批判しているということである。私はフランス人たちの論難に立ち会ったことがあるし、イタリア人たちのきわめて厳しい非難を聞いたこともある。ある人たちはペリオンを学識ある人間の数に含めようとはしなかったし、他の人たちはペリオンが十分に忠実なアリストテレス翻訳者であることも、彼がギリシア語からラテン語へ十分に優雅に翻訳したことも否定していた⁽³⁷⁾。

私はペリオンが翻訳した他のアリストテレスの著作についてはいまは何も言わないことにしよう。ただ『ニコマコス倫理学』だけを手にとり、これまでよりもはるかに注意深くアリストテレスのギリシア語と比較してみた。[[*6] v] 私はおらずと、しかし率直に私の思うところを述べることにしよう。ペリオンのラテン語訳でアリストテレスを読む人には、驚くべき秩序ときわめて純粋な文章で綴られたこの哲学者の議論をたどることは不可能である、という結論に私は達したのである⁽³⁸⁾。

学識ある人ニコラ・グルシはこのことを見てとりペリオンの訳文を修正しようとしたが、すべての欠陥を正したわけではなく、かえって改悪した部分もある。私はグルシのように修正を加えるのではなく、最初から新しい翻訳を作ることに着手した。

私はその際4つのことを行なおうとした。(1)アリストテレスの考えをできる限り明瞭かつ忠実にラテン語で表現すること。(2)平俗、簡潔、正確かつほどほどに洗練され、教育に最も適した文体を用いること。(3)印刷刊本だけでなく手写本を含めて最良かつ最も誤りの少ないテキストを求め、探索し、参照し、読みの異同を入念に考察し、読者が読みの正しさを確認できるようにするため注解の中に異同を挙げた。[[*7] r] (4)多くの箇所を、一部は古い写本によって、また一部は推定によって修正した⁽³⁹⁾。

私はペリオンや他の人びとを傷つけることを目的としたわけではない。ただアリストテレスの重要な倫理書がこれまですぐれたラテン語に移されていなかったことを嘆かわしく感じただけである。翻訳者のあるものはアリストテレスの思想を十分に忠実に理解せず表現していないし、あるものは拙い文章でこの哲学者の光輝を暗くし、汚し、消しているように思われるからだ。

(第1巻第1章の注解 (scholia))⁽⁴⁰⁾

[278] 1. Et consilium] この書物を翻訳する際、私は1つのものを指すのにほぼ一貫して同じ1つの単語を使うように努めた。とりわけ倫理に関するこの議論に関連する単語や、さまざまなものの定義や分割や区別に用いられたり、それ自体が定義され他の単語と区別される単語の場合である。それは文章を明瞭にし、同一のものを指す多種多様な単語によって読者が混乱しないようにするためである⁽⁴¹⁾。

προαίρεσις が何かはギリシア語を齧っただけの人間でも知っているが、どのラテン語の単語に対応するのかははっきりしないし、そうした単語は存在しないと主張する人たちさえいる。ピエル・ヴェットーリ [Pier Vettori; Petrus Victorius, 1499-1585. 1538-83年フィレンツェ大学のギリシア語・ラテン語教授] がこの意見であり、フィレンツェ大学でこの書物を講義している時、ラテン語で講義しているにもかかわらず、常にギリシア語の *προαίρεσις* を用いていたのである。

ペリオンを含む人たちは *propositum* と訳すが正しくない。 *propositum* は目

的のことか目的に関して言われる単語だからである、キケロの多数の箇所（『書簡集』第1巻、『善悪の究極について』第4巻、第5巻）が示すとおりである。

delectus に当たるわけでもない、この単語はギリシア語の単語よりも意味の幅が狭いからである。

[279] *συνέδριον* [集会] や *συμβουλή* [助言] という意味ならば *consilium* ですらない、アリストテレスはこれらを論じているわけではないのだから。

institutum はこれよりも意味の幅が広いが、ギリシア語の単語が指すものには関連していない。

結局のところ、同じものを指すのにこれだけ多数の単語を使っているということが、アリストテレスが特にどの単語を用いるか決めていなかったことの証拠になっている。にもかかわらず、同じ〔ラテン語の〕単語を常に使い続ける方が、同じものを指すこれほど多くの単語によって読者の学習と記憶を混乱させるよりも良いと思われた。

したがって私は、*προαίρεσις* をラテン語で *consilium*, *προαιρεῖσθαι* を *consilium capere* と訳した。ラテン語の *consilium* がギリシア語の *προαίρεσις* と同じ意味、つまり、あることをするかしないかの明確で固定し決定づけられた判断であることは、プラウトゥス（『黄金の壺』）とキケロ（『アカデミカ』第1巻、『ピリッピカ』第11演説、『善悪の究極について』第5巻、『義務について』第1巻、『善悪の究極について』第3巻）が示すとおりである。[280] これらの引用文では、単数形の *consilium* をギリシア語で *προαίρεσις*、複数形の *consilia* を *προαιρέσεις* と言い換えることが可能である。

2. *Bonum aliquod appetere videtur*] *ἀγαθοῦ τινὸς ἐφίεσθαι δοκεῖ*. ペリオンはこれを *ad bonum aliquod refertur* と訳しているが、良い翻訳だとは私には思われない。(1)*ἐφίεσθαι* は *ὀρέγεσθαι* と同じ意味、つまり、求める・欲するという意味である。(2)なぜ *appetere bonum* という言い回しを避けなければならないのか私にはわからない。キケロも善を定義する箇所では使っているのである（『善悪の究極について』第2巻）。(3)ラテン語では無生物は動詞 *appetere* の主語になりえないと言う人がいるが、キケロにも無生物主語をとる例はある（『ルッルス農地法反対演説』、『トゥスクルム荘対談集』第3巻）。(4)*ad aliquod referri* と *aliquod appetere* とは意味が別である。

[281] 3. Muneris functiones] *ἐνέργειαι* を私はラテン語にこう訳した。アリストテレスが *πράξις* と *ἐνέργεια* という2つの名詞を使っているように、ラテン語でも *actio* と *functio muneris* という2つに訳し分けるためである。〔ペリオンはどちらにも *actio* という同一の訳語を当てている。〕動詞 *ἐνεργεῖν* を *fungi munere* とうまくラテン語に訳せることは、良いラテン語作家からわかるとおりである（カエサル、キケロ『予言について』第2巻、『トゥスクルム荘対談集』第1巻）。名詞 *ἐνέργεια* を *functio muneris* と訳せることはキケロ（『トゥスクルム荘対談集』第2巻）に見える。

4. Vni alicui facultati] 私は *ὑπὸ μίαν τινὰ δύναμιν* とするいくつかの古いテキストの読みに従ったが〔ペリオンは *ἀρετήν*, Bywater は *δύναμιν* とする〕、エウストラティオスもこれを裏づけている。古い翻訳者が従った他のテキストは *ἀρετήν* とするが、これが正しい読みと認めるとしても、ここでは *δύναμιν* という意味だろう。

こうしてランバンは、文体、哲学の必要性、文献学という3つの観点からペリオンを批判し、ペリオンの翻訳を自分の翻訳に置き換えようとしている。人文主義的な洗練されたラテン語を用いながらも、行きすぎたキケロ主義を避けて簡潔さ・明瞭さを優先すること。1つのギリシア語の術語に1つのラテン語の訳語を対応させることによって、哲学者にも使いやすいラテン語訳アリストテレスを提供すること。より信頼できるギリシア語底本に基づいてラテン語訳を行ない、キケロを含む幅広いローマ古典を典拠として訳語の選択を正当化すること。ランバンの批判は、15世紀後半から繰り返されてきたキケロ主義論争のさらなる1幕でもあるし、西ヨーロッパの翻訳史の中でおそらく最も興味深いものの1つであるジョアシャン・ペリオンの翻訳論の特異さを浮き彫りにしているようにも筆者には見える。

付録：『ニコマコス倫理学』第1巻第1章のギリシア語原文と 中世・ルネサンス期のラテン語訳文

以下に『ニコマコス倫理学』第1巻第1章のギリシア語原文と中世・ルネサンス期のラテン語訳文を掲げる。最初が現代の標準的刊本（OCT）によるアリスト

テレスのギリシア語, 続いて中世のラテン語訳2種 ('Antiqua' と 'Vetus', それぞれ, ロバート・グロステストまたはムルベケのゲイレルムス, ヘンリクス・コスベインに帰される), その後にルネサンス期の翻訳4種, 訳者は順にレオナルド・ブルーニ, ヨアンネス・アルギュロプロス, ジョアシャン・ペリオン, ドニ・ランパン ([] は参照した英国ブリティッシュ・ライブラリー所蔵本の請求番号を示す). なお, 言うまでもなく, ラテン語の訳者たちが底本としたギリシア語テキストは Bywater 校訂のテキストと同一だったわけではない.

Aristotelis Ethica Nicomachea, ed. I. Bywater (Oxford: Clarendon Press, 1894)

(1094a1-18) Πᾶσα τέχνη καὶ πᾶσα μέθοδος, ὁμοίως δὲ πρᾶξις τε καὶ προαίρεσις, ἀγαθοῦ τινὸς ἐφίεσθαι δοκεῖ· διὸ καλῶς ἀπεφήναντο τὰγαθόν, οὗ πάντ' ἐφίεται. διαφορὰ δέ τις φαίνεται τῶν τελῶν· τὰ μὲν γὰρ εἰσιν ἐνέργειαι, τὰ δὲ παρ' αὐτάς ἔργα τινά. ὧν δ' εἰσὶ τέλη τινὰ παρὰ τὰς πράξεις, ἐν τούτοις βελτίω πέφυκε τῶν ἐνεργειῶν τὰ ἔργα. πολλῶν δὲ πράξεων οὐσῶν καὶ τεχνῶν καὶ ἐπιστημῶν πολλὰ γίνεται καὶ τὰ τέλη· ἱατρικῆς μὲν γὰρ ὑγίεια, ναυπηγικῆς δὲ πλοῖον, στρατηγικῆς δὲ νίκη, οἰκονομικῆς δὲ πλοῦτος. ὅσαι δ' εἰσὶ τῶν τοιούτων ὑπὸ μίαν τινὰ δύναμιν, καθάπερ ὑπὸ τὴν ἵππικὴν χαλινοποιικὴ καὶ ὅσαι ἄλλαι τῶν ἵππικῶν ὀργάνων εἰσίν, αὕτη δὲ καὶ πᾶσα πολεμικὴ πρᾶξις ὑπὸ τὴν στρατηγικὴν, κατὰ τὸν αὐτὸν δὴ τρόπον ἄλλαι ὑφ' ἑτέρας· ἐν ἀπάσαις δὲ τὰ τῶν ἀρχιτεκτονικῶν τέλη πάντων ἐστὶν αἰρετώτερα τῶν ὑπ' αὐτά· τούτων γὰρ χάριν κάκεῖνα διώκεται. διαφέρει δ' οὐδὲν τὰς ἐνεργείας αὐτάς εἶναι τὰ τέλη τῶν πράξεων ἢ παρὰ ταύτας ἄλλο τι, καθάπερ ἐπὶ τῶν λεχθεισῶν ἐπιστημῶν.

'Conuersio antiqua': *Decem librorum Moraliū Aristotelis, tres conuersiones: Prima Argyropili Byzantii, secunda Leonardi Aretini, tertia vero Antiqua...communi, familiarique commentario ad Argyropilum adiecto.*

(sig. A i r) Omnis ars, et omnis doctrina, similiter autem et actus, et electio: bonum quoddam appetere videntur. Ideoque bene enunciauerunt: bonum, quod omnia appetunt. Differentia vero quedam videtur esse finium. Hi quidem enim sunt operationes. hi vero preter has, opera quedam. Quorum autem sunt fines quidam preter operationes: in his meliora existunt operationibus opera. Multis autem operationibus entibus, et artibus, et doctrinis: multi sunt et fines. Medicinalis quidem enim sanitas, nauifactiue vero nauigatio, militaris autem victoria, economice vero diuitie. Quaecumque autem sunt talium: sub vna quadam virtute, quemadmodum sub equestri frenefactiua et quaecumque alie equestrium instrumentorum sunt. hec autem, et omnis bellica operatio sub militari. secundum eundem modum: alie sub alteris. In omnibus itaque architectonicarum fines, omnibus sunt desiderabiliores iis que sunt sub ipsis. Horum enim gratia et illa persequimur. Differt autem nichil operationes ipsas esse fines actuum, aut propter has aliud quiddam: quemadmodum in dictis doctrinis.

‘Vetus translatio’: *Omnis ars et omnis doctrina...* (Louanii: Per Conradium Braem in alma Vniuersitate Louaniensi, 1476) [IB.49303.]

(no sig. or fol.) Omnis ars et omnis doctrina similiter autem et actus et electio bonum quoddam appetere videntur. Ideo bene enunciauerunt bonum quod omnia appetunt. Differentia vero quedam videtur esse finium. hi quidem enim operationes. hi vero preter has opera quedam. Quorum autem sunt fines quidam preter operationes in his existunt meliora operationibus opera. Multis autem operationibus entibus et artibus et doctrinis multi fiunt et fines. medicinalis quidem enim sanitas. nauifactiue vero nauigatio. militaris autem victoria. yconomice vero diuitie. Quaecumque autem sunt talium sub vna quadam virtute quemadmodum sub

equestri frenefactiua. et quecumque alie equestrium instrumentorum sunt. hec autem et omnis bellica operatio sub militari. Secundum eundem itaque modum alie sub alteris. In omnibus itaque architectonicarum fines omnibus sunt desiderabiliores his que sunt sub ipsis. horum enim gratia illa persequuntur. Differt autem nichil operationes esse fines actuum. aut propter has aliud quiddam: quemadmodum in dictis doctrinis.

Leonardus Aretinus: *Aristotelis Philosophi Ethicorum ad Nicomacum liber...* [colophon] Aristotelis...libri Ethicorum Decem de moribus per... Leonardum aretinum e greco in latinum traducti finiunt... (Romae: Conradus Suueynheym, Arnuldus Pannartz, 1473) [IB.17205.]

(fol. [1] r) Omnis ars omnisque doctrina similiter autem et actus et electio bonum quoddam appetere uidentur. Qua propter bene ostenderunt summum bonum quod omnia appetunt. Videtur autem inter fines differentia quedam: Alii nanque sunt operationes: Alii preter eas opera aliqua. Quorum uero fines sunt: aliqui preter actiones: in his potiora sunt opera quam operationes. Sed cum multi sint actus: et artes et scientie: fit etiam ut multi sint fines. Nam medicine quidem sanitas: Nauicularie uero nauigium: rei militaris autem uictoria: Economice uero diuitie. Quot cum autem sunt huiusmodi: sub una aliqua uirtute et quemadmodum ars frenorum faciendorum: et alie omnes que ad structuram equorum pertinent: sub equestri consistunt: Ipsa uero equestris et omnis bellica actio sub re militari. Eodemque modo alie sub aliis. In cunctis autem fines earum que magis principes sunt: omnibus inferioribus sunt anteponendi. Nam illorum gratia istos persequuntur. Nihil autem refert utrum operationes ipse fines sint actuum: uel preter ipsas aliud quiddam quemadmodum in his que appellantur scientie.

Ioannes Argyropylus: *Opus Aristotelis de moribus ad nicomachum, a*

Ioanne argyropylo...traductum. (Florencie: Per Nicolaum Laurentii, 1480?) [IB.27087.]

(sig. [a iiij] r) Omnis ars, omnisque doctrina, atque actus itidem et electio: bonum quoddam appetere uidetur. Quapropter bene ueteres bonum ipsum id esse dixerunt quod omnia appetunt. Finium autem differentia quaedam esse uidetur. Quidam enim sunt operationes: quidam praeter has ipsas opera quaedam. Atque in quibus praeter operationes, alii quidam sunt fines: in iis ipsa opera sunt, operationibus praestabiliora. Cum uero complures sint actus et artes, atque scientie, fit ut multi sint etiam fines. Medicinae nanque finis est sanitas. Artis extruendarum nauium nauis, facultatis rei militaris uictoria: et familiaris rei gubernandae, diuitiae. Quae autem talium sub aliqua una potentia sunt, ut ars conficiendorum frenorum, caeteraeque omnes instrumentorum equestrium effectrices sese habent ad facultatem equestrem, et haec cum illis omnisque actio bellica ad militarem facultatem: et ad alias aliae simili modo, in iis omnibus, fines earum quae rationem architecturae subeunt: magis fuit expetibiles quam omnes fines inferiorum. Et illi enim horum gratia expetuntur: Atque nihil interest, siue fines actuum ipsae sint operationes, siue praeter ipsas aliquid aliud: ut in dictis facultatibus intueri licet.

Ioachimus Perionius: *Aristotelis de moribus, quae Ethica nominantur...a Ioachimo Perionio...latinitate...donati...* (Basileae: Robert Winter, 1542) [1471.f.16.]

(pp. 1-2) Omnis ars, omnis doctrina, omnis actio, omne studium et institutum, ad bonum aliquod refertur. Itaque probe ueteres summum bonum definierunt, id ad quod omnia referuntur. Finium autem genera sunt plura. Vnum eorum qui actione, alterum eorum qui non solum actione,

sed etiam opere cernuntur. Ac quarum rerum praeterquam quod actiones, alii praeterea fines sunt, in iis natura sunt opera meliora actionibus. Et quoniam multae actiones et officia erant, complures etiam fines extiterunt. Nam et medicinae ualetudo proposita est, et arti aedificandarum nauium nauis, et rei militari uictoria, et rationi rei familiaris diuitiae. Quaeque artes eius generis uni alicui facultati subiectae sunt, (uelut rei equestri ea quae frenos conficit, caeteraeque omnes quae instrumenta equorum tractant, ut haec ipsa et omnia officia bellica rei militari, itemque aliae alii) in iis omnibus, fines earum quae principem locum tenent, magis expetendi sunt, quam omnium earum quae sub eas suiectae sunt: quippe cum horum causa etiam illi expetantur. Nihil autem interest, utrum actiones ipsae sint actuum fines, an aliud quippiam. [*sic*: the last clause—“καθάπερ ἐπὶ τῶν λεχθεισῶν ἐπιστημῶν”—left untranslated]

Dionysius Lambinus: *Aristotelis de Moribus ad Nicomachum libri decem ...E graeco et latine et fideliter...a Dionysio Lambino expressi. Eiusdem Dionys. Lambini in eosdem libros annotationes...* (Venetiis: Ex Officina Erasmiana, apud Vincentium Valgrisium, 1558) [520.b.9.]

(pp. 1–2) Omnis ars, et omnis docendi uia et ratio, itemque actio, et consilium bonum aliquod appetere uidetur. Itaque pulchre ueteres id esse summum bonum pronuntiarunt, quod omnia appetunt. Ac uidentur quidem inter se fines discrepare. Alii enim sunt muneris functiones, alii praeter eas, opera quaedam. Ac quarum rerum praeter actiones, aliqui sunt fines, in his opera sunt actionibus meliora natura. Quoniam uero multae sunt actiones, artes, et scientiae: multi quoque fines extiterunt. Nam medicinae finis est, bona ualetudo: artis aedificandarum nauium, nauis: artis Imperatoriae, uictoria: rationis eius quae in re familiari tuenda uersatur, diuitiae. Quaecunque autem artes huius generis uni ali-

cui facultati subiectae sunt, ut equestri ea quae in frenis conficiendis occupata est, ceteraeque omnes ad instrumenta equestria comparatae, atque haec ipsa equestris, omnisque actio militaris, arti Imperatoriae, itemque aliae aliis: in iis omnibus fines earum, quae principem locum obtinent, earum quae eis subiectae sunt, finibus sunt optabiliores. Nam illorum causa hi quoque expetuntur. Nihil porro interest utrum functiones ipsae muneris actionum sint fines, an praeter has aliud quippiam, quemadmodum apparet in iis artibus, quas supra diximus.

注

- (1) ペリオンの伝記については以下を参照. *Nouvelle biographie universelle depuis les temps les plus reculés jusqu'à nos jours* (Paris, 1852), Vol. 39, coll. 613-4; Charles B. Schmitt et al., eds., *The Cambridge History of Renaissance Philosophy* (Cambridge: Cambridge University Press, 1988), p. 831; J. F. Maillard, J. Kecskeméti et M. Portalier, eds., *L'Europe des humanistes (XIV^e-XVII^e siècles)* (Paris: Centre National de la Recherche Scientifique / Turnhout: Brepols, 1995), p. 343. ペリオンのアリストテレス注解の書誌については以下を参照. Charles H. Lohr, *Latin Aristotle Commentaries: II. Renaissance Authors* (Firenze: Olschki, 1988), s.v. "Perionius (Périon), Joachimus, O.S.B.", pp. 322-324. ペリオンの翻訳論に関する数少ない研究として, 以下を挙げておく. André Stegmann, "Les Observations sur Aristote du Bénédictin J. Périon", in *Platon et Aristote à la Renaissance: XVI^e Colloque International de Tours* (Paris: J. Vrin, 1976), pp. 377-389.
- (2) Jürgen Leonhardt, *Latin: Story of a World Language*, tr. Kenneth Kronenberg (Cambridge, MA: Belknap Press, 2013), pp. 184-197; cf. Silvia Rizzo, "Il latino nell'Umanesimo", in *Letteratura italiana. Vol. V: Le Questioni* (Torino: Einaudi, 1986), pp. 379-408.
- (3) Charles B. Schmitt, *Aristotle and the Renaissance* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1983).
- (4) David A. Lines, *Aristotle's Ethics in the Italian Renaissance (ca. 1300-1650): The Universities and the Problem of Moral Education* (Leiden: Brill, 2002).
- (5) Schmitt, *Aristotle and the Renaissance*, pp. 64-88.
- (6) *Aristotelis Philosophi Ethicorum ad Nicomacum liber...* [colophon] Aristotelis... libri Ethicorum Decem de moribus per...Leonardum aretinum e greco in latinum traducti finiunt... (Romae: Conradus Sueyneyheim, Arnoldus Pannartz, 1473).

- (7) Leonardo Bruni, *Sulla perfetta traduzione*, ed. Paolo Viti (Napoli: Liguori, 2004), pp. 74–86; cf. Viti, “Introduzione”, *ibid.*, pp. 60–63.
- (8) Bruni, *Sulla perfetta traduzione*, p. 84: ‘...interpres quidem optimus sese in primum scribendi auctorem tota mente et animo et voluntate convertet et quodammodo transformabit eiusque orationis figuram, statum, ingressum coloremque et linamenta cuncta exprimere meditabitur.’
- (9) James Hankins, *Repertorium brunianum: a Critical Guide to the Writings of Leonardo Bruni. Vol. I: Handlist of Manuscripts* (Roma: Istituto Storico Italiano per il Medio Evo, 1997).
- (10) Arthur Field, *The Origins of the Platonic Academy of Florence* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1988), pp. 55–76, 107–126.
- (11) *Opus Aristotelis de moribus ad Nicomachum, a Ioanne argyropylo...traductum* (Florentiae: Per Nicolaum Laurentii, 1480?).
- (12) Lines, *Aristotle’s Ethics in the Italian Renaissance*, pp. 483–484 (Bruni), 487–489 (Argyropoulos).
- (13) Donati Acciaoli Florentini prooemium in expositionem libri ethicorum Aristotelis ad clarissimum virum Cosmum Medicem (Florentiae: Apud sanctum Iacobum de Ripoli, 1478); cf. Field, *The Origins of the Platonic Academy*, pp. 202–230.
- (14) ラテン語訳は1542年バーゼル版を用いた。 *Aristotelis de moribus, quae Ethica nominantur, ad Nicomachum filium, Libri decem, a Ioachimo Perionio ita nunc demum latinitate (idque adeo ex ipso Cicerone) donati, ut superior omnis horum conuersio prae hac in plerique ridicula ac barbara uideatur* (Basileae: Robert Winter, 1542). [British Library: 1471.f.16.]
- (15) *Aristotelis de moribus, quae Ethica nominantur*, “Epistola”, sig. a 3 v: ‘At uero in libris Aristotelis...tanta repente sententiarum ac rerum obscuritas nobis legentibus occurrit, tanta etiam uerborum insolentia et ariditas, ut pueri uix primis literis eruditi aptius et loquantur et scribant.’
- (16) 『最良の翻訳法について』も1542年バーゼル版を用いた。 *Ioachimi Perionii Cormoeriaceni de Optimo genere interpretandi, in Aristotelis x. libros Ethicorum, siue de Moribus, a se latinitate donatos, Commentarii: In quibus et de optima imitandi ratione, et de conuertendis coniungendisque, Graecis cum Latinis praecepta traduntur, ad utriusque linguae proprietatem et copiam parandam mire accommodata* (Basileae: Robert Winter, 1542). [British Library: 520.b.18.]
- (17) *Ioachimi Perionii Cormoeriaceni de Optimo genere interpretandi*, “Praefatio”, sig. a 3 r–b 3 r. (以下、本文中に [] で折丁番号を示す。)
- (18) *Ibid.*, sig. a 3 v–a 4 r: ‘Vna [sc. causa ratioque], quod...quod huius artis principium est et caput, sententiam eius libri quem conuertendum suscipiunt, primum per

singulas clausulas animo concipere, deinde secum ipsi cogitare, quemadmodum si rem quam animo tenent, a se, non ab alio inuentam, exprimere dicendo uellent, copiose id splendideque facerent.... Nunc...eam quasi religionem suscipere coguntur, ut nisi uerbum pro uerbo reddant, nunquam se auctoris sententiam putent consecutos.’

- (19) *Ibid.*, sig. a 4 r: ‘Altera est, quod etsi in uno aliquo artium genere excellunt, tamen in alio id praestare student, quod copiose et ornate tractare non possint. Multi enim sunt, qui quod in multis disciplinis recte intelligunt, tamen diserte non possint explicare dicendo. Id quod perspicui potest, cum in aliis multis artibus, tum uel maxime in Philosophia...’
- (20) *Ibid.*, sig. a 6 r-a 6 v: “Nec tantum exprimi uerbum e uerbo necesse erit, ut indiserti interpretes solent.... Equidem soleo etiam quod uno Graeci, si aliter non possum, id pluribus uerbis exponere.”
- (21) *Ibid.*, sig. a 7 r: ‘...ut quae uerba singula, quibus pluribus, aut quae singula singulis paria essent, cognosceremus.’
- (22) *Ibid.*, sig. b 1 r: ‘Nam si interpretatio ad id unum excogitata esset, ut fideliter sensa aliorum hominibus traderentur, id quidem satis esset. Nunc quoniam interpretatio, oratio est: oratio autem illustris esse debet, copiosaque et splendida, efficiendum nobis est, ut his suis luminibus ne careat, aut spoliatur potius interpretatio.’
- (23) *Ibid.*, sig. b 2 r: ‘...si diserte quid e graeco interpretari uelimus, haec duo tenenda esse necessario: unum, ut uerbum ex uerbo exprimendum non putemus: alterum, ut graeca cum latinis maxime Ciceronis eiusdem generis fere coniungamus. Quae duo qui negliget, is non solum indiserte, sed barbare etiam multa dicat necesse est.’
- (24) *Ibid.*, sig. b 2 v: ‘Quod eo faciendum censui potissimum, ut Philosophia, quae ex Ciceronis temporibus nata est latinis literis, cuique ille quasi ciuitatem dedit, cum Romae quasi peregrinari uideretur, his temporibus renascatur iisdem literis, in ciuitatemque illam suam, ex qua expulsa eiectaque est, tandem aliquando tanquam postliminio reuertatur.’
- (25) *Ioachimi Perionii Cormoeriaceni de Optimo genere interpretandi*, “Annotationes in librum primum”, pp. 1-8. (以下、本文中に [] でページ番号を示す。〔 〕は筆者による補注.)
- (26) *Ibid.*, p. 2: “Quorum ego orationes, si ut spero, ita expressero...uerba persequens eatenus ut ea non abhorreant a more nostro”, etc.’
- (27) *Ioachimi Perionii Cormoeriaceni de Optimo genere interpretandi*, “Annotationes in librum tertium”, pp. 175-186.

- (28) ベッカー版ページ番号は筆者の付加である。
- (29) Lohr, *Latin Aristotle Commentaries: II. Renaissance Authors*, s.v. “Gruchius (de Grouchy), Nicolaus”, p. 175.
- (30) 岩波書店刊新旧『アリストテレス全集』における訳語の変更の事例を参照（旧版 1968-73 年，新版 2013 年-）。『形而上学』（新版未刊）では，たとえば *ἄλη* が（旧）質料→（新）素材，*οὐσία* が（旧）実体→（新）本質存在または文脈に即して訳し分ける，と変化しているらしい。
- (31) Schmitt, *Aristotle and the Renaissance*, pp. 76-87.
- (32) Lohr, *Latin Aristotle Commentaries: II. Renaissance Authors*, s.v. “Lambinus (Lambin), Dionysius”, pp. 214-216; cf. Jill Kraye, “Renaissance Commentaries on the *Nicomachean Ethics*”, in Olga Weijers, ed., *The Vocabulary of Teaching and Research between Middle Ages and Renaissance* (Turnhout: Brepols, 1995), pp. 111-116.
- (33) *Aristotelis de Moribus ad Nicomachum Libri decem. Nunc primum e graeco et latine et fideliter, quod vtrunque querebantur omnes praestitisse adhuc neminem, a Dionysio Lambino expressi. Eiusdem Dionys. Lambini in eosdem libros annotationes, quibus cum obscuri loci multi illustrantur, deprauatque emendantur, tum, quid inter hanc et ceteras horum librorum conuersiones intersit, aliqua ex parte ostenditur* (Venetiis: Ex Officina Erasmiana, apud Vincentium Valgrisi, 1558). [British Library: 520.b.9.]
- (34) *Aristotelis de Moribus ad Nicomachum Libri decem*, “Dionysius Lambinus erudito, et bonis artibus expolito lectori. S. D.”, sig. [*5] r-[*7] v. (以下，本文中に [] で折丁番号を示す。)
- (35) *Ibid.*, sig. [*5] r-[*5] v: ‘Nam Perionium quidem...magnam ex sua interpretatione laudem esse consecutum non nego: sed eundem superioribus omnibus ita praestare, ut etiam iis, qui aetate sunt posteriores, omnem ad alius laudis spem aditum intercluserit, palmamque praeripuerit, id profecto nego.’
- (36) *Ibid.*, sig. [*5] v: ‘Quid enim Argyropylo praeter orationis nitorem, atque elegantiam defuisse dicemus? quam culpam non hominis fuisse, sed temporis... Quanta autem ille reconditarum artium, et Graecarum literarum cognitione floruit? Quis erit Perionii fautor ita pertinax, ut eum audeat Argyropylo antepone?’
- (37) *Ibid.*, sig. [*6] r: ‘...cum hi Perionium in disertorum numero non haberent: illi quererentur eundem neque satis fideliter Aristotelem interpretatum esse, neque satis eleganter, aut, ut ita dicam, rotunde, graeca latine reddidisse.’
- (38) *Ibid.*, sig. [*6] v: ‘Ex illorum librorum lectione in hanc opinionem discessi, ut existimem fieri omnino non posse, ut is qui Aristotelem Perionio interprete Latine loquentem legat, disputationem huius Philosophi de moribus mirifico ordine,

purissimoque sermone absolutam, assequatur.’

- (39) *Ibid.*, sig. [*6] v–[*7] r: ‘Primum Aristotelis sententiam quam apertissime et fidelissime potui, oratione latina expressi: deinde orationis genere usus sum humili, presso, subtili, tenuiter limato, et ad docendum quam maxime accommodato: Tum optima et emendatissima exemplaria non solum typis excusa, uerumetiam manu scripta conquisiui, exploraui, consului: lectionis uarietatem diligenter consideraui, eamque in meis annotationibus eo consilio proposui, ut tu lector erudite de ueritate, et (ut ita dicam) germanitate scripturae iudicares: Postremo multos locos partim ueterum codicum fide ac testimonio fretus, partim coniectura quadam ductus emendaui.’
- (40) *Aristotelis de Moribus ad Nicomachum Libri decem*, “Dionysii Lambini scholia, In librum primum”, pp. 278–281. (以下、本文中に [] でページ番号を示す。)
- (41) *Ibid.*, p. 278: ‘Studui ego in his libris vertendis ad vnā rem significandam, vna et eadem voce perpetuo fere vti, praesertim quae ad hanc disputationem de moribus pertineret, et vel in definitione, diuisioneque ac distinctione aliqua rerum dissimilium adhiberetur, vel ipsa definiretur, atque ab aliis distingueretur: idque eo consilio feci, vt et planior esset oratio, et ne conturbaretur lector variarum vocum pro re eadem multitudine.’